

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

二兎を追う：共同研究：
朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎研究(2009-2012)

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2012-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5565

昨年末、金正日死亡の報道が世界をおどろかせたが、その後の新聞をはじめジャーナリズムにおいては北朝鮮の後継体制の予測記事が多かった。2012年1月25日の朝日新聞には、そうした北朝鮮に関する報道についての紙面審議会での論議が掲載された。そこには「民衆の暮らしびりをつかんで」として、そのためには「北朝鮮内部情報の入手に向け、中国国境の朝鮮族や脱北者、北朝鮮内の情報源を増やす更なる地道な努力を期待する」といった声が載せられていた。と同時に「海外取材ではその国が出す情報に頼ってしまうところがある。その一方で、脱北者からの話が聞けてもリアルタイムではないうえに断片的で、偏っていることがある。『携帯電話が普及している』『中国元が流通している』という情報を得ても、その社会的、経済的な背景まではよくわからない」というジャーナリストの反省も聞かれた。これは多くの国民の疑問でもある。こうした声に、私たちはどう答えられるのだろうか。

この共同研究は「朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究」というタイトルをつけたように、その目的は北朝鮮についてのジャーナリスティックな関心とは別にあったが（『民博通信』No.129）、2月16日に金正日が70歳を迎え、4月15日に金日成生誕100周年を迎える今年2012年には、北朝鮮社会になんらかの変化が起きることを想定し、それに先立ち北朝鮮に関する学術的資料を本館に整えておく必要性を考えて2009年秋から3年半の計画で始めたものである。その意味では、共同研究会のメンバー全員が、今日の北朝鮮の状況に対しても強い関心を持ち、その情報収集にもアンテナを張るとともに、北朝鮮の社会的・文化的背景を明らかにしていく使命をもつことを自覚している。

前回の報告では、私個人の研究内容を紹介した（『民博通信』No.133）。今回はそれ以降の共同研究会の全体について報告するが、その内容は、そうしたメンバーの自覚を反映するものになっている。まずは、発表順にタイトルを列記する。

- ・脱北者研究にみる北朝鮮の体制と生活の語り（太田心平 国立民族学博物館）
- ・「トンネ」の発見——総聯系エスニックメディアにおける「場所」の物語（島村恭則 関西学院大学）
- ・北朝鮮の歴史認識——考古学に関する中国語文献を通して（韓景旭 西南学院大学）
- ・北朝鮮の文化政策の変遷（高正子 神戸大学）
- ・在家僧部落の宗教文化——北朝鮮で刊行された報告書を基にして（川上新二 岐阜市立女子短期大学）
- ・大田在住の脱北者からみた社会への適応と葛藤——北朝鮮での生活から韓国での生活へ（林史樹 神田外語大学）
- ・歴史的脈絡からみた韓国内脱北者の社会的適応過程に関する論議（李賢珠）

・北朝鮮社会研究の人類学的展望——科研費プロジェクト中間報告（伊藤亜人 早稲田大学）

これらの発表タイトルから見てもわかるように、私たちの北朝鮮研究の方法論は大きく2つに分かれる。1つは文献研究であり、もう1つは脱北者を対象とするフィールドワークである。

文献研究

韓景旭は、北朝鮮で刊行された中国語版の『大同江文化』（2001年）の第2章5節「大同江流域は古代文明発祥地の1つ」という論考をもとに、北朝鮮が自国の歴史をいかに認識しているかを考察した。

高正子は、オ・ヤンヨル「北韓の文化芸術政策」『北韓の放送言論と芸術』（景仁文化社、2006年）、チャン・チョルヒョン『北韓の文化政策』（ソウル経済経営、2008年）、チョン・ヨンソン『北韓民族文化政策の理論と現場』（ヨクラク、2005年）という韓国で出版された3冊の文献を通して、北朝鮮の文化政策を時期区分し、それぞれの時期における内容を紹介し、その変遷を明らかにした。

このほか島村恭則は、北朝鮮と関係の深い朝鮮総聯の事業体である朝鮮新報社発行の日本語雑誌をとりあげる。1962年に創刊された『朝鮮画報』は1997年に休刊となり、1996年にこれに代わるように『イオ』が創刊される。この『イオ』の第2号（1996年8月）で使われた「朝鮮人村」という言葉が、第12号（1997年6月）で「同胞トンネ」という言葉に代わる。「トンネ」とは、地域同胞の精神的共同意識をもつ「村」をさしている。そして、第20号（1998年2月）では「『トンポトンネ』はここにもある」という特集が組まれ、それ以降「トンネ」という言葉が頻出することに注目する。そして、この「トンネ」現象を起こした背景に、在日朝鮮人社会においても、1990年代末の高度産業化と「場所」の消滅・再編や個人化とアイデンティティの再構築があると分析する。今回の発表は、日本社会における朝鮮総聯の変化についてであり、直接には北朝鮮社会の研究とは結びつかないが、これらの雑誌の分析も視野に入れていかなければならないだろう。

脱北者研究

脱北者を通して北朝鮮を知るという研究方法は、かつて太平洋戦争下の米国でルース・ベネディクトが日系人収容所をまわり、そこでの調査をもとに『菊と刀』を書き、日本人の「文化の型」を示した研究方法を想起させる。現地でフィールドワークができない北朝鮮においては、脱北者を通じた情報収集は、重要なツールの1つである。

しかし、太田心平はこれまでの韓国における脱北者の研究を整理し、それらは現在の韓国を基準とした枠組みで調査が行われており、脱北者からの聴き取り調査には彼らの立場に



日本植民地期の朝鮮半島の風水形局（李夢日 1991『韓国風水思想史』明寶文化社、p. 191）。

よるバイアスがかかっており、こうした限界を認識したうえで、読み取っていくことが必要であると指摘する。

こうした韓国側の研究の限界を超えるためには、開発人類学の手法にならい、脱北者に研究協力者として参与してもらうという当事者参加型のアプローチが必要であると、伊藤亜人は説く。具体的には、高齢の脱北者たちに継続的に面会し、調査者の意図を十分に理解してもらい、自らの体験を自発的に記述してもらい、それをもとに更なる面接調査を行うというものである。高齢者の体験手記からは、子供の頃からの長いスパンでの北朝鮮での生活情報を得ることができ、1970年代の初めから韓国社会で調査してきた伊藤は、自らの体験と比較して見ることで総体的に把握できるという。

脱北者研究はまた、脱北者自身の生活文化を知ることにもなる。林史樹は、韓国の地方都市である大田広域市に居住する脱北者のボランティア・グループと活動をともしながら、1969年生まれの女性を主たるインフォーマントとして、北朝鮮での生活、脱北の経緯とともに、韓国での現在の生活についてのインタビュー調査を試みた。

また、2007年からソウル西部に居住する脱北者を調査し、今年ハワイ大学で博士学位を取得した李賢珠に特別講師として発表してもらった。李の発表は、脱北者（韓国で公式には北韓離脱住民と呼ぶ）の呼称の変化をはじめ、反共と統一という2つの相反するイデオロギーが混在する韓国社会が、彼らをどのように受け入れてきたか、それが彼らのアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのかといった問題を通して、脱北者を現代的現象としてではなく、韓国という国家の近現代史的脈絡で論議しようというものであった。また、脱北者は、中国で一定期間の生活を経験して来たかなど、脱北の経緯によって韓国社会への適応や北朝鮮社会に対する見方が異なってくるため、彼・彼女らを一概には論じられないといった示唆的な発言もあった。

最後に、こうした北朝鮮研究のほかに、私たちは共同研究のタイトルそのままに、朝鮮半島の民俗文化に関する基礎的研究も行っていることも明示しておきたい。川上新二は、北

朝鮮の科学院考古学民俗学研究所が科学院出版社（平壤）を通じて刊行した民俗学研究叢書第2集『民俗学論文集』（1959年）所収の「咸鏡北道北部山間部落（＜在家僧＞部落）の起源に関する研究」、および民俗学研究叢書第3集『咸鏡北道北部山間部落（＜在家僧＞部落）の文化と風習』（1960年）に基づいて、在家僧部落の宗教文化を紹介する。在家僧部落は、京城帝国大学の教授であった秋葉隆によって、朝鮮半島東北部の咸鏡北道に散在していたことが報告されているが、川上は今回の文献資料の分析により、そこで見られる祭祀の習慣が自身で行ってきた朝鮮半島西南部に位置する全羅南道の珍島での事例と類似していることを指摘する。また、在家僧部落の人々の「山」に対する観念を抽出し、朝鮮半島全体の「山の神」の信仰について再考しようという仮説を提示する。北朝鮮の民俗を再検討することで、朝鮮半島全体に視野を広げることができる、よい事例発表であった。

北朝鮮の人類学的研究は、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」ではないが、北朝鮮に入っのフィールドワークをしなければならぬ。しかし、現状においては、まずは虎を得る前に兔を追うことになる。すなわち、ジャーナリストや国民の声にも答えるような北朝鮮の実践的な研究に寄与すべく、周辺からの情報により北朝鮮の現在の状況を把握すること、そして北朝鮮の基層的な文化を探ることである。「二兔を追う者は一兔をも得ず」という格言があるが、前者の研究にとって後者の研究は、その社会的・文化的背景のルーツを明らかにするものでもあり、両者は不可分なものである。また、1人での研究では二兔は追えなくとも、共同研究の場では何兔も追うことができる。私たちは、二兔を追いつつ、虎児を得る用意をしてゆきたい。

あさくら としお

文化資源研究センター教授。編著に『変貌する韓国社会・1970～80年代の人類学調査の現場から』（嶋陸奥彦と共編 第一書房 1998年）、『世界の食文化①韓国』（単著 農山漁村文化協会 2005年）など。